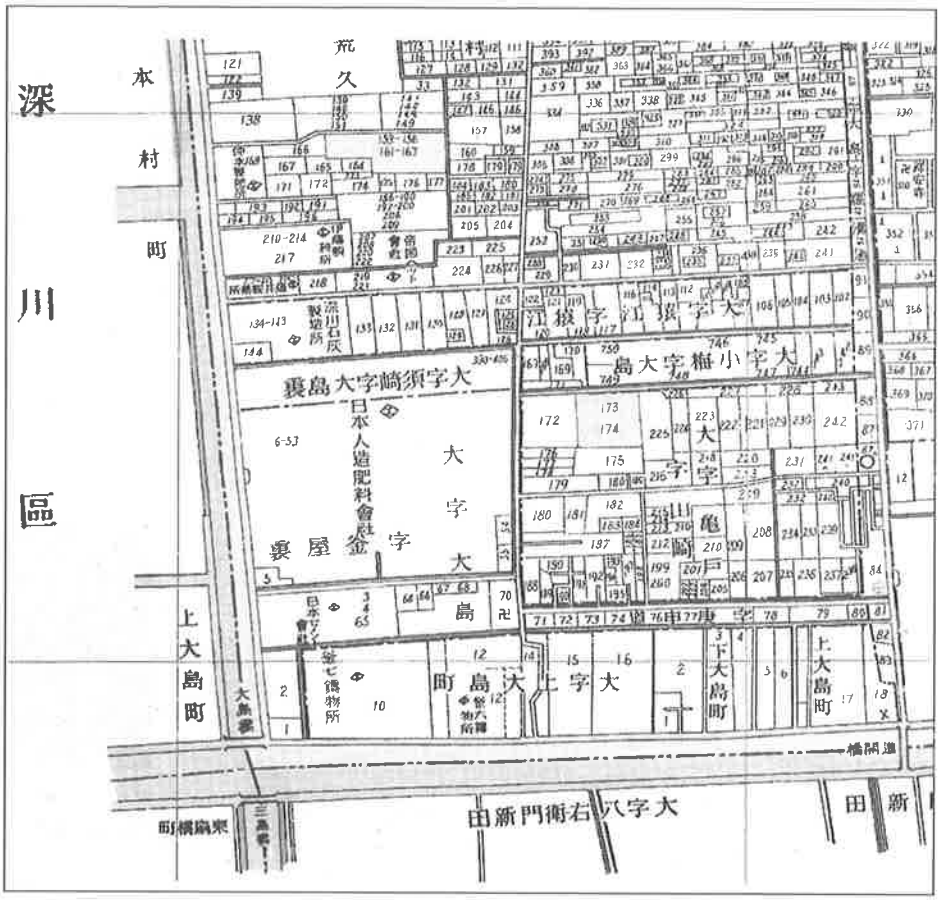
資料館ノート　第37号　　平成14年1月16日発行

横十間川から明治通り

江東区深川江戸資料館

隅田川口から上流に向かって、先号の横十間川までで小名木川の半分（深川地域）を遡りました。今回からは大島・砂町（城東地域）の小名木川沿岸の歴史や史跡を紹介します。

今号は、横十間川から上流に向かって明治通り（進開橋）までの地域です。



亀戸町・大島町全図〔部分〕（明治44年逓信協会　人文社刊）

釜六・釜七と釜屋堀

小名木川と横十間川の合流付近の北岸は、深川上大島町と呼ばれ、釜屋六右衛門（釜六）・釜屋七右衛門（釜七）の鋳造工場がありました。釜七の子孫が所蔵する資料（『深川金屋之興並芝店之由緒』）によれば、初代・田中知次は近江国（滋賀県）の人で、江戸初期の寛永17年（1640）25歳の時に江戸に下りました。当時の工場と店は芝の田町にありましたが、都市化が進み鋳造には向かない土地柄となったため、万治元年（1658）高輪に移転しました。しかし、船による運搬が不便であったため、翌2年（1659）、河川に恵まれ、営業に良い土地柄であった大島村へ、再度、移転しました。

釜六は、釜七初代・知次の母方のいとこ・安左衛門が初代です。この人も職人で、諸国を歩いて仕事をしていましたが、知次が呼び寄せて一緒に仕事をするようになりました。彼は同業の職人が廃業するのにともない、道具を買い取り、独立するための土地を探していました。そこで、土や藁（わら）・縄などを納めていた人の屋敷地が広大で工場に適していたため、ここを買い取り独立しました。買い取った場所が大島村です。

このように、江戸初期から大島村で営業していた釜六・釜七は、幕府の用品をはじめ、市井の生活用品である鍋、釜や、梵鐘（ぼんしょう）、仏像、天水桶（てんすいおけ）などを鋳造しました。釜六家（太田氏）は明治維新後まもない11代目で廃業、釜七家（田中氏）は明治末年まで存続しました。

作品は区内にも残っており、善徳寺（三好2－16）の天水桶（伝文化4年・1807作）、おさん稲荷（牡丹1－6）の天水桶（明治30年・1897作）、浅間神社（亀戸9－15）の天水桶（明治33年・1900作）などが残っています。

また、横十間川の小名木川から竪川の間は、窯六・窯七が住んで営業していたところから「釜屋堀」とも呼ばれました（『御府内備考』巻之百二十五・深川之十五）。現在、大島橋（現在地は架橋当初よりやや北方に架橋）の大島側（東詰）に小さな「釜屋堀公園」があります。この付近は、化学肥料製造の研究をしていた高峰譲吉が、製品化に成功し、渋沢栄一ら財界有力者とともに明治20年（1887）「東京人造肥料会社」を設立したところです。その後「大日本人造肥料株式会社」となりましたが、初めて化学肥料の製品化に成功したことを顕彰する「尊農碑」が、この公園内に建てられています。

小名木川の渡し

江戸時代には、小名木川に架かる橋は３橋（万年橋・高橋・新高橋）のみでしたが、明治に入りようやく進開橋（明治通り）と丸八橋（丸八通り）が架かりました。それまでは、対岸に行くにも回り込まなければならず、そのため、「渡し」が発達しました。横十間川以東にもいくつかの渡しがあり、この付近でも「釜屋の渡し」がありました。この渡しは、上大島町（現大島１－18）と八右衛門新田（現北砂１－３）の小名木川間を往復していました。

しかし、渡しは河川への架橋に伴い減少し、廃止されていきました。「釜屋の渡し」の正確な廃止時期は不明ですが、昭和17年（1942）刊行の『城東区史稿』に、「現存する渡し」として名前が掲載されていますので、昭和１７年以降のことでしょう。

この他、製糖の渡し（大島４－20～北砂５－21）・草屋の渡し（大島８－39～東砂２－13）などがありました。

南岸の史跡

小名木川の南岸、今の北砂一丁目辺りに目をやりましょう。現北砂小学校付近に土佐藩の下屋敷がありました。この土佐藩にまつわる史跡がいくつか残っています。

ひとつは、幕末の有名な刀工左行秀（さのゆきひで）の作刀場がありました。行秀は、筑前国（福岡県）の出身ですが、弘化４年（1847）に土佐藩の城下に入ることを許され、文久の頃に江戸にきました。行秀は、正宗の門下、左文字の祖・三郎左衛門の流れを汲むところから「左」の号を用いています。作風は、長大で身幅の広い鎬造（しのぎづく）りの刀が多く、「於東武土佐藩左行秀造之　慶応三年二月日」「於東武砂村元八幡宮北左行秀造之　慶応三年二月吉日」などの作品が現存しています。現三島橋（当初よりやや南方に架橋）の東詰に「左行秀鍛錬場跡」の石柱が建てられています。

本所深川絵図〔部分〕（文久２年・1862）

もうひとつ、幕末の外交顧問として活躍した、ジョン（中浜）万次郎宅跡があります。

万次郎は土佐の漁師で、天保12年（1841）14歳の時漁に出て遭難、太平洋上を漂流し鳥島に漂着、半年後にアメリカの捕鯨船に助けられ、アメリカで教育を受けました。

嘉永４年（1851）に帰国後、土佐藩・幕府に登用され、通訳・翻訳で幕末の外交に大いに貢献・活躍しました。また、万延元年（1860）幕府の軍艦咸臨丸（かんりんまる）に同船し、通訳として渡米もしました。維新後は、開成学校（東大の前身）の教授も務めました。万次郎の長男の著した『中濱萬次郎伝』によると、明治元年から13年（1868～80）まで、砂村にあった土佐藩の下屋敷に住んだことが記されています。

貨物線（昭和30年）　大島２丁目から北砂方向を見る。

小名木川駅

大正12年（1923）の関東大震災後、復興景気により工業は著しく発展し、それに伴って鉄道輸送量が増大し輸送力の増加が必要になりました。これまでは、錦糸町駅で貨物輸送を取り扱っていましたが、限界になり昭和４年（1929）亀戸―小名木川間が開通し、小名木川駅が開業しました。この駅は、小名木川河畔に14,400m^{2}のドックを備えた「水陸連絡貨物専用駅」として発足（はしけ）しました。駅周辺一帯は工業地帯であり、川の艀の便もよく、江東第一の貨物駅でした。また、近くに木場を控えており、材木の受入と運搬も盛んで、地域の特色がよく表れていました。昭和20年（1945）３月の東京大空襲で壊滅的な打撃を受けましたが、同24年４月に輸送を再開しました。さらに、同33年には小名木川―越中島間が開通し、越中島駅が開業しています。

近年、小名木川駅の再開発や越中島貨物線を利用してのＬＲＴ（新都市交通システム）計画が持上り検討されています。今後、区民にとって「うるおいのある街」創りが期待されるところです。